社会医療法人財団　天心堂

ぶんごの赤ひげ

Vol.54

目次 contents

国際緊急援助隊
医療チームに参加して …… 1～4

へつぎ病院 呼吸器内科について …… 5

加齢とともに増える
疾患と治療について …… 6

【天心堂の医療目標】　良質にして包括的な保健・医療・福祉を地域に提供する
そして１００年を超えて生きつづける医療を実践する

発行日／2023年00月00日　発行／社会医療法人財団 天心堂　発行者／河村 忠雄

住所／〒879-7761 大分市大字中戸次字二本木5956番地
TEL.097-597-4535　FAX.097-597-7231
https://www.tenshindo.org

社会医療法人財団
天心堂

国際緊急援助隊医療チームに参加して

天心堂 へつぎ病院 臨床工学課　尾藤 恵

４か月前のことですが2023年２月６日にトルコでM7.8、M7.5と２回の大きな地震が発生しました。その時に、報道で「国際緊急援助隊」という言葉を聞いた方もいらっしゃるかと思います。今回、縁があり国際緊急援助隊医療チーム２次隊として初めて参加することができました。その際に、周りの方々から色々な質問をいただきましたので、その内容をまとめてみたいと思います。

Q1. どうすれば 国際緊急援助隊になれるの？

A. 一番多かった質問ですが、まずは登録が必要です。書類を提出して仮登録をしたら、導入研修を受講します。その後、合格できれば本登録をして、中級研修や展開訓練などの研修に参加することができます。私は、友人の誘いがあり約６年前に医療チームの医療調整員として登録をしました。普段は病院で臨床工学技士として透析業務や医療機器管理業務などをしていますが、医療チームでは普段の知識、技術はもちろんですが、医療機器の組み立てやそこにあるもので修理できる能力が必要だと今回感じることが出来ました。

Q2. トルコに派遣されるまでが早くないですか？どれぐらいの間行くのですか？

A. 私は２次隊だったので、まだ時間の余裕があったほうだと思います。国際緊急援助隊派遣の決定は外務省が行い、その命令を受けてＪＩＣＡ（独立行政法人国際協力機構）が隊員募集、決定、派遣などを行っています。１次隊の早い方ですと、２月10日朝に募集の一斉メールがあり午後までに応募して、選定されれば２月12日に出発という方もいらっしゃいました。派遣期間は通常２週間と決められています。

Q3. どんなところで活動するのですか？

A. トルコ国内での活動場所は勝手に決められるわけではありません。トルコ政府と緊急医療チーム調整本部（ＥＭＴＣＣ）で各チームの活動場所を決定しています。今回、日本チームはGAZIANTEP県Oguzeli市にある職業訓練校の敷地内＜写真①＞に場所を借りて活動しました。この近くにある地域の国立病院が被災し、元々の建物での患者受け入れが困難で、職業訓練校の建物内で外来診療をしているが

＜写真 ①：訓練校前の敷地＞

疲弊しているという現状でした。

この訓練校前の敷地をお借りして今回、日本チーム初運用となるType２という手術室や分娩室も兼ね備えているテントを張って＜写真②＞病院を作っていきました。テントや機材などは日本から全て運んでいます。展開訓練で訓練はしていますが、敷地の広さなどはそれぞれ異なるためその場所に合わせたレイアウトが必要になります。この敷地に一から病院を作ってくださった１次隊の方々には感謝してもしきれません。

＜写真②：テント張の様子＞

これが完成した日本チームの病院＜写真③＞になります。

＜写真 ③：完成した病院＞

Q4. 何人くらいで行くの？言葉は通じるの？

A. ２次隊は65名のチームで派遣されました。内訳は 団長、副団長、医師、看護師、薬剤師、診療放射線技師、臨床検査技師、理学療法士、臨床工学技士、ロジスティシャン（物資調達管理調査員）、業務調整員です。この人数で各部門にわかれて業務を行っていきます。言葉はトルコ語でしたので、もちろん話せませんでした。そこで、頼もしい存在なのが現地での通訳の方々です。トルコ語、英語、日本語を医師、看護師と患者の間に入りすべて通訳してくれます。現地で日本語を勉強された方々が多かったので、皆さん日本語が堪能でした。 自分の仕事を休んでボランティアで数日間参加してくださっていて、本当にありがたい存在でした。ただ、もちろんですが全員に通訳がつけるわけではないので、ポケトークやグーグル翻訳などを使用してコミュニケーションをとることも多くありました。

Q5. どんな仕事をするの？

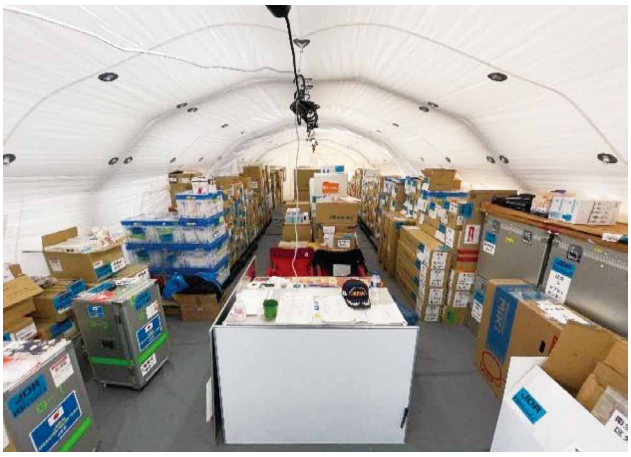
A. 受診をしにきた現地の人々に対して診察を行い、検査、処置などを行っていきます。病院受診と同じ流れです。１日に100人前後の受診があります。必要であれば、手術室で手術を行い、テント内で点滴を行ったり入院もすることができます。臨床工学技士の仕事は医療機器のセッティングが大事な業務になります。１次隊の担当者は麻酔器などの組み立てを行い、手術室と分娩室を完成させていました。

＜写真④：完成した手術室＞

＜写真 ⑤：診察室＞

今回の派遣で、私はサプライセンター配属となりました。サプライセンターの業務は、外来、病棟や手術室などで使用する医療機器の管理と、衛生材料の管理でした。医療機器に関しては１次隊の担当者がとてもきれいにセッティングしてくれていたので、私はそのまま引き継ぐことができましたが、衛生材料の管理は難題でした。１次隊の方々はテントを立ち上げたり、患者の受け入れを始めたりと衛生材料の整理にまでとても手が回る状況ではありませんでした。どこに何があるかがわかりにくい状態だったので、サプライ部門長を中心にわかりやすいように整理を行いました。数日間かかりましたがとても良いものができました。

＜写真⑥：整理前のサプライセンター＞

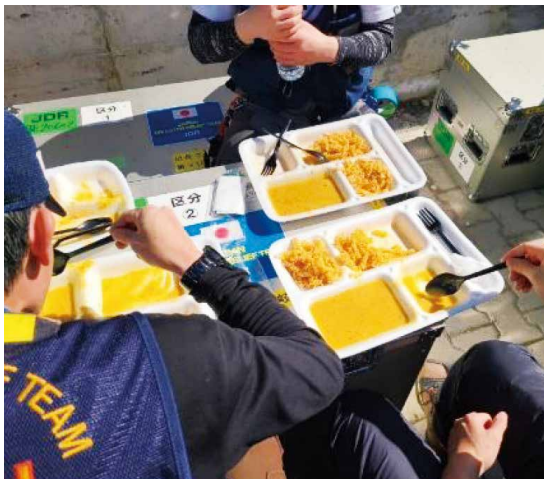


＜写真⑦：整理後のサプライセンター＞

Q6. 食べ物は？生活はどのようにするの？

A. 朝食、夕食は日本から持ってきている非常食をメインに食べていました。昼食<写真⑧>は病院の裏に食堂を設けて、トルコの方が作ってくださる料理をいただいていました。パスタやスープ、パンなどですが、どれもとても美味しくいただきました。

宿営地は病院近くの学校にあるフットサルコートにテントを張らせてもらいました。各個人のテントになっていて、夜は寒さが厳しいので、寝袋を２枚重ね着してその間にカイロや湯たんぽなどを入れて寝ていました。シャワーはシャワー用テントが２つあり、順番に使用することができました。



<写真 ⑧：昼食の様子>

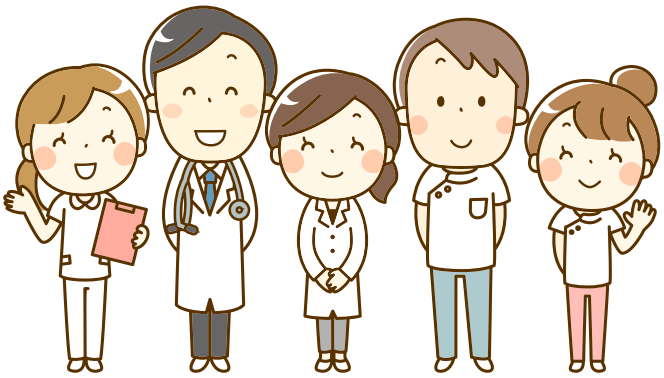
<写真 ⑨：宿営地のテント>

<写真 ⑩：シャワーテント>

日本チームの活動は２次隊から３次隊に引き継ぎ、３月14日に３次隊が撤収作業を終えて帰国しました。今回の活動での課題を次につなげられるようにこれからも精進していきたいと思います。

最後に２週間業務を離れ、応募したいと言った私を応援してくれた透析センターのスタッフの皆様、病院関係者の皆様にこの場を借りて感謝申し上げます。

(写真提供 JICA)



へつぎ病院　呼吸器内科について

呼吸器内科　梅木　健二

呼吸器内科は常勤医師２名、大分大学医学部からの非常勤医師１名で診療にあたっており、肺炎、喘息、COPD、肺がん、びまん性肺疾患などの疾患に対して、的確な診断のもとに最良の治療を行う体制を整えています。

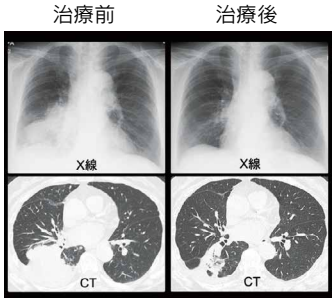
幅広い呼吸器（肺や気管支）の病気に対応しています。

肺や気管支などの呼吸器の病気は疾患の幅が広く、総合内科専門医をはじめとして、呼吸器学会専門医・指導医、呼吸器内視鏡学会気管支鏡専門医・指導医、アレルギー学会専門医・指導医、感染症学会専門医、結核・抗酸菌症認定医などの資格を有した医師が、最新の医療技術を駆使して、患者さんにとって最適な治療を提供できるよう努力しています。

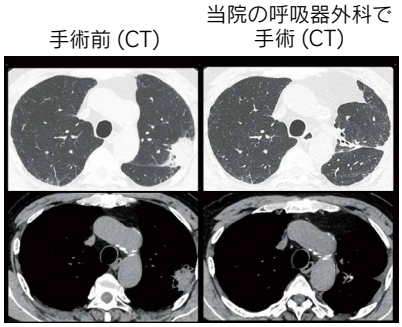
当院の透視室でＸ線を用いながら病気のある部位に位置を合わせて気管支鏡検査を実施します。

肺がんについて

日本国内で男女とも肺がんの患者さんは増加傾向にあります。一方で治療法は飛躍的に進化しています。診断法はＸ線やCTなどの画像検査のほか、気管支鏡と呼ばれる直径4mm程度の内視鏡などを使用して行います。治療に関しては当院の呼吸器外科との連携、放射線治療が必要な患者さんは、大分大学医学部附属病院、大分県立病院などと連携を行っています。当院で気管支鏡を行った症例の一部を提示します。



症例１：
当院で気管支鏡を実施し肺がんの診断で内服、注射による治療を行い改善しています。



症例２：
気管支鏡を実施し肺がんの診断となり、当院の呼吸器外科で手術を行なった症例です。

喘息について

大人の喘息や咳喘息が増えてきており、呼吸機能検査や呼気NO（エヌオー）検査などでの診断が有用です。呼気NO検査とは、右記のような機械で行うことができ、呼気（吐いた息）に含まれる一酸化窒素という気体の濃度を測定することで、気管支の炎症の程度を把握するものです。

呼気NO検査について

呼気NO検査：左上の機械に息を吹き込むことで気管支の炎症の程度を評価できます。測定の際に雲や風船、メモリなどを見ながら息を調節して測定します。

咳が長引く方へ

咳が３週間以上続く方は、専門的に診断を行った方が良いとされています。咳が長引く要因として、咳喘息やアトピー咳嗽、後鼻漏、胃食道逆流などが多いとされており、X 線や CT などを含めて総合的に診療しています。咳喘息を疑う症状を下記の表に示します。

咳止めだけでは改善しないことが多いため、ぜひ気軽に専門外来を受診して下さい。

◆咳喘息を疑う症状

- 喘鳴（ゼーゼー）を伴わない咳嗽が３～８週間以上続く
- 咳は夜間～早朝に強くなることが多い
- 呼気 NO 濃度が高くなることがある

加齢とともに増える疾患と治療について

整形外科　今川　正人

◆整形外科で対応している疾患は

圧倒的に変形性関節症と脊椎の変形症状が多いですね。

腰や首が悪い、肩が悪い、膝が悪い、股関節が悪い、腰と膝の方がすごく多いです。

◆その原因はどういったことがありますか

一番は加齢です。それと若い頃からの生活習慣によるところが大きいです、職業柄とか。

戸次に来て思ったのはやはり市内に比べると圧倒的に農業をされている方が多いので手の変形、膝が痛くても無理している方がすごく多いです。

◆治療方法にはどういったものがありますか

基本的には患者さんに選択肢を与えています。

整形外科の治療は保存治療が基本だと教わってきましたので、内服による薬物療法、関節へのヒアルロン酸注射、それにリハビリテーションなどを希望に合わせて組み合わせて行います。

変形性膝関節症は軟骨がすり減る病気です。すり減った軟骨は自然には絶対に再生しません。よくサプリのコマーシャルがありますが、プラセボ効果もありますし体に害はありませんので、希望する患者さんには飲みたければ飲んでもいいよというスタンスです。

変形性膝関節症の手術でみますと完全に磨り減りカチカチに変形した軟骨が丸見えになっている状態ですので、薬や注射で簡単に改善するものではありません。日常生活もままならない程の方には、人工関節の手術になりますが、希望される方は近隣の膝を専門にされている整形の先生を紹介しています。ただリスクもありますのでいきなり手術は避け、痛みをとり緩和治療でそれなりに生活をおくれればよいのではないかと思います。

痛みの程度も人によってそれぞれで、薬と注射でそこそこいけるよという方、中には外出するのもおっくうになるくらい立ったり座ったりするだけでミシミシ痛むという方にはリスクを承知したうえでの手術をおすすめしています。手術して痛みがゼロになったいう方もいますが、人工関節というのは動きが悪くなりますので元々は痛くても正座できていたのができなくなったりします。傷んだ軟骨は交換できたとしても周りの組織が拘縮してしまい違う痛みが残る方もいます。手術して誰もが 100%よくなるわけではないと説明しています。

他には腰部脊柱管狭窄症も多いです。これも原因は加齢と生活習慣です、多かれ少なかれ皆さんおこります。アジア人はなりやすいと言われています。

農業されている方は中腰で作業されることが多いのでどうしても膝や腰に負担がかかります。

◆先生の専門領域は

今までやってきた範囲ですと外傷と脊椎です。ただ今は、大腿骨の頸部骨折などはその日に手術することが多いですので、機械とかストックをあらかじめ置いている病院へ紹介しています。

◆診察の前準備をとても丁寧にされているとお聞きしていますが、何か心がけていることがありますか

整形だけを診るのではなく、患者さんの家族や日常おこった出来事を知っていて話す方が患者さんも肩肘はらずにフランクに話してくれます。今度どこそこに行くのでそれまでに膝の痛みを少しでもとっておきたいとか話の内容をカルテに残しておけば、

無事に行けたかなとか、雑談の中でいろいろとみえてくることもありますから。

準備しておけば外来がスムーズに進みます。内科の患者さんは採血、レントゲンと検査結果をみてと１人に係る時間がどうしても長くなります。整形外科はそんなに時間はかかりませんが人数が多いです。ある程度待たせないように、かといって「お薬を出してはい終わり」では患者さんもよい気はしませんから、あらかじめ情報を知ってお話しでき痛みやしびれはどうか病状も聞けて納得していただけて不満なく帰っていただくよう心がけています。

◆入院患者さんについてはいかがですか

今へつぎ病院では保存治療の方が多いですから状態が安定している患者さんが多いです。

定期的に顔を出して症状を聞いて、週１回異常がないかレントゲン等で確認しています。

朝早い時間に患者さんのところに行きます。でないとリハビリに行って部屋にいませんから。

朝早い部屋にいる時間に顔出して症状を確認するようにしています。そうすると患者さんも不安がなくなるかなと思います。

◆忙しい毎日ですがリフレッシュ方法は

映画鑑賞、音楽鑑賞や子供の野球を見に行ったりしています。あとスイーツ食べたり、甘いものが好きなのでコンビニで新製品が出たら買います。

◆整形疾患の予防方法を教えてください

若い方から中年の方、今のうちから骨と筋肉をしっかりと鍛えてください。カルシウム、ビタミンの摂取、日光を浴びる、運動をして特に体幹と大腿の筋肉を鍛えておくことです。

そうすると圧倒的に転倒のリスクが減ります。あと足の裏の感覚を鍛える、私は冬でも裸足なんです。

足の指でタオルを引いたりリハビリでもやります。足の裏の感覚と筋肉を鍛えておくと転倒しそうになっても踏ん張りがききます。60 代 70 代の方は骨密度の検査をしてください。この 10 年程みてて思いますが骨折が減りました。それは骨粗鬆症の検査をして治療する内服や注射のいい薬が今はたくさんありますので骨密度があがります。おかげで転倒しても骨折する方が半分になったイメージがあります。骨粗鬆症の治療をしっかりすれば 80 歳、90 歳で痛い思いをしなくてすみます。

膝や腰の違和感、痛みが続くなどの際は我慢せずに早めにご相談ください。

生活の質を落とさないためにも
早期の治療を開始しましょう。

～着任医師紹介～

古野（ふるの）　薫（かおる）

回復期リハビリテーション病棟専従医
日本臨床神経生理学会専門医
日本リハビリテーション医学会認定リハビリテーション科専門医・指導医
日本老年医学会認定老年病専門医

地域連携相談部

みなさん、「地域連携相談部」をご存じですか ??

へつぎ病院の「地域連携相談部」は、患者さんがスムーズに受診・入院できるように、また、住み慣れた地域へ退院できるように、医療機関、介護施設をはじめ、行政や福祉に関わる多くの施設との「つなぐ役割」を担っています。

主なスタッフは、医師、看護師、医療ソーシャルワーカー（社会福祉士）になります。

外来診察や、入院・退院のこと、福祉制度や施設の利用法等でお困りのことがありましたら、お気軽にご相談下さい。

天心堂へつぎ病院　地域連携相談部	
直通 電話 /FAX	電話：097-597-5812　　FAX：097-597-3667
受付時間	8：30 ～ 17：30　（土日・祝日を除く）
場　　所	へつぎ病院　２階　カフェテリア前